梅鶯仏教壮

第8号
2004年
2月8日

私の好きな言葉

田中　隆
梅鶯仏壮会員
法輪寺門徒総代

還暦も過ぎ今年９月で６３歳、気持ちはまだ現役ですが、体力や動作は若いときのようにはいきません。しかし今日こうして梅鶯仏壮例会で回を重ねる毎に、色々なご縁を頂くことができ、有り難いことと感じるこのごろです。

日常のくらしの中でもなにげなく発する言葉に、「ありがとう」「おかげさま」があります。

愛知県は豊川の農家へ行ったとき、老いも若きも「ありがとう」の言葉の語尾に「さま」という言葉をつけて挨拶なさるところがあり、さり気なく土地の言葉となっていて、こころが穏やかになりました。

以前ご法話で、「ありがとう」の言葉についていろいろとお聞きしましたが、お念仏に通じる言葉のように思え、好きな言葉の一つとして折に触れ使うことがよくあります。「言葉はこころ」と思いつつ・・・。

ある時、ゴルフ場でキャディさんに、「今日は機嫌良いですね！」とたずねたら、「今日はお客さんから、度々ありがとうの言葉を聞いて、とても嬉しい思いをしていますので。」と、こたえられたことを想い出します。

自分が使ってもたのしいし、相手もまた是然り。食前食後のことば「ありがたくいただきます」も、ひとりの時にこそ自然に発したいと思っています。

これからも、梅鶯仏壮の皆様のお陰により、会に参加させて頂けることを感謝しつつ、次の例会を楽しみにしています。

§§§

題材法話

○正信偈　心の拠り所

昭和の名横綱で土俵の鬼と言われた「初代若の花」が、初優勝を成し遂げて絶頂期の時に、勝雄ちゃんという幼子をちゃんこ鍋で大やけどをさせ死なせるという大変な出来事がありました。

悲しみの内に葬儀となり、適当にお坊さんを頼んでお経が始まったのですが、悲しみに暮れていたお経は違う。きみダメだ。『そのうむ若の花が突然、『りょうでないときみょうだりょうでないとダメなんむ俺の息子は、そうであんだ。』と叫んだそこで改めて浄土真宗のお寺さんに頼んで、葬式をやり直したとまります。

若の花が正信偈を浄土真宗のお勤めとして知っていたわけでも、いわんやそのお経の内容を知っていたわけではないと思います。若の花は真宗門徒の多い北海道室蘭出身で、多分幼い時から、家族一緒にお仏壇の前でよく正信偈をお勤めしていたのだろうと思います。

それがいつの間にか心の拠り所となっていたのです。正信偈はそれほど真宗門徒にとって親しみ深く、馴染みのあるものなのです。

正信偈は親鸞聖人の南無阿弥陀仏様と出会えたことの悦びの詩であり、おお勤めしているとなにか心温まる、嬉しいときにはより嬉しく、悲しいときにはなにか慰められるような気がします。やはり、阿弥陀様やお釈迦様、そして親鸞様から呼びかけられているような、そんな気がするのではないでしょうか。

○正信偈１２０句の構成

だからといって意味は関係なくただ呪文のごとく称えておれば良いというものではありません。

より悦びを深めるためには、その内容を知るためにこしたことはありません。

正信偈は１２０句からなる漢詩ですが、大きく三段に区分けすることができます。

その第一段は最初の２句「帰命無量寿如来南無不可思議光」で、帰敬序と呼びます。

これは、「無量寿である如来、不可思議光である如来に全てをお任せいたします。」という親鸞聖人自らの信心の表明であり、この２句に正信偈の全てが集約されているといっても過言ではありません。

そして、次の「法蔵菩薩因位時から難中之難無過斯」までの４２句は第二段で、仏教というお悟りになられたお釈迦様の教えをもとに悦びを詠われております。

そして最後の第三段は「印度西天之論家から唯可信斯高僧説」までの７６句で、これはお釈迦様以降、インド、中国、日本とお釈迦様のお念仏のみ教えを正しく伝えてくださった七人の高僧の教えに基づき悦びを詠われています。この七高僧は「龍樹菩薩、天親菩薩、曇鸞大師、道綽禅師、善導大師、源信和上、源空上人（法然上人）」で、そのお名前は全て正信偈の中に出てきます。一度改めてご確認下さい。

正信偈に書かれている内容については、今後折に触れて味わっていきたいと思います。

１月３１日例会

住職法話より

なお、法話の後半は次号に掲載させて頂きます。

☆☆☆